

中予推進ブロック 研究報告

松前町立北伊予小学校、北伊予中学校

1 取組の内容及び成果

中予ブロックは、北伊予中学校と北伊予小学校の2校で構成されている。北伊予中学校を中核校として北伊予小学校と連携し、小・中の「つながり」を意識した実践研究を推進してきた。

(1) 小・中連携カリキュラムの研究

- ① 小・中それぞれの目標や学習内容、指導方法の理解を深める研修の実施
- ② 児童生徒の実態についての積極的な情報交換と交流研究

○ 英語推進部会の発足

研究を円滑に進めていくために英語推進部会（小学校：研修主任、国際理解教育担当教員、中学校：英語科教員）を発足し、児童生徒の実態についての情報交換を行ったり、小・中それぞれの目標や学習内容、指導方法の理解を深め、授業改善を行ったりする研修を進めた。また、年間を通して、小・中学校で外国語活動・英語の公開授業を行い、授業の検証・改善により、次の授業へ生かしていくようにした。小学校の教員が、外国語活動での学びが中学校の英語科の授業にどのようなにつながっているのかを知るとともに、中学校の教員は、小学校時の外国語活動での生徒の様子を知ること、生徒理解が深まり、個々に応じたきめ細かい指導につなげることができた。

○ カリキュラムの作成と実践

小・中連携カリキュラムの作成に当たり、まず、「英語ノート」と「Sunshine」の題材を連携させ、目標や活動、使用する語彙や表現を明らかにする小中5年間の題材系統表を作成した。そして、小・中連携の視点を踏まえた単元ごとの指導計画を作成した。この単元別指導計画を基に、小・中の教員が連携の視点や接続を確認し、意識しながら学習内容を指導していくとともに、児童生徒自身が小・中のつながりを実感できる指導を工夫した。小・中の学びがつながっていると授業で示すことで、児童生徒の学習意欲が持続し、意欲的に学習に取り組むことができた。

○ 小・中連携を視野に入れた中学校英語入門期の指導

小学校6年生の3月から中学校1年生4月までの小・中の接続部分においては、「小6・中1つなぎシート」を作成し、言語材料や学習活動に連続性をもたせて指導した。小・中の学びが接続するこの時期に、小学校は外国語活動の到達度・カリキュラム・学習内容などに関する情報や資料を中学校へ提供し、中学校は外国語活動の授業を参観して、児童の実態を把握した。そして、小学校から提出された資料に基づき、中学校英語入門期の授業計画を作成・検討した。

(2) コミュニケーション能力育成のための指導の在り方の研究

- ① 児童・生徒にとって興味・関心の高い題材、コミュニケーションが求められる題材の開発、研究
- ② 相手意識や目的意識をもち、互いの思いを伝え合う楽しさやよさが感じとれる活動の工夫

小学校外国語活動では、外国語の音声・表現に慣れながら、伝え合う必然性、場面・相手意識、通じる喜びを重視するコミュニケーションの授業を目指している。

そこで、授業での活動を、英語に慣れ親しむ活動（歌、チャンツ、ゲーム、クイズなど）からコミュニケーション活動（インタビュー、スキット、スピーチなど）へとつながるよう配列した。その際重視したことは、「聞く活動」から「話す活動へ」という順次性である。いきなり発話を求めるのではなく、児童にとって負担が軽い「聞く活動」により、表現の音イメージや使用場面を十分に理解させることが大変重要である。また、自然な発話につながる小学校での豊富な音声によるインプットは、中学校英語の授業での豊かな発話にもつながるなどメリットは大きい。このように、様々な活動を通して楽しみながら音声・表現に慣れ、知らないうちに使用表現が言えるようになることを意識し、指導を行った。

(3) 評価の在り方の研究

① 学習意欲やコミュニケーションを図ろうとする態度についての指導と評価の在り方の研究

② 自己評価や相互評価の工夫

○ 北伊予小学校の取組

授業中に評価できる場面は限られていることから、教師による授業中の見取りだけでなく、児童個人による評価の積み重ねができるように「振り返りカード」を活用した。「振り返りカード」には、1時間の自分の活動を振り返る際の視点を、授業の活動内容を踏まえて具体的に示した。また、授業の導入では、本時のめあてを毎時間確認し、児童が1時間の活動の見通しがもてるようにした。

「振り返りカード」の活用は、児童にとって、その時間の取り組み方が明確になるとともに、次時への意欲を高める上で効果的であり、活動を振り返るよい手だてとなっている反面、カードを記入する時間の確保とコメントを書くことに負担を感じている児童も見られたことから、様式や記入方法を工夫する必要があると考える。また、記述内容も「～ができるようになった。」「～を覚えた。」などのコメントが多く見られるため、コミュニケーション活動の楽しさや、友達と関わったり友達の考えに触れたりすることのよさを実感した内容となるように、ねらいを明確にして指導に当たる必要性を感じた。

○ 北伊予中学校の取組

中学校英語の指導においては「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を総合的に育成し、それを統合的に活用する言語活動を行うことが求められる。授業では単元目標に準ずる評価規準を明確にし、それに基づいた評価カードを作成して、各観点における生徒の達成状況を確認し、日々の指導に生かしている。この評価カードは、各単元における個々の知識の定着を図るとともに、自由記述を設けることで、生徒の本音を知るよい手だてともなっている。

2 成果のあった取組事例

(1) 小・中連携における新しい取組～小中合同による授業の実施～

① 児童生徒の実態

5月に実施した中学1年生を対象としたアンケート結果によると、入学前に英語学習に不安を抱えていた生徒は7割を超えていた。その理由として、「中学校の英語は難しそう」「英語で話すのは苦手である」等が挙げられていた。しかし、それらの不安は実際に中学校の英語の授業が始まってみると大きく解消されていることが分かった。その理由としては、「小学校で習ったことが中学校でも繰り返し出てきている」「ペアやグループ学習があって楽しい」等が挙げられていた。この

ような実態を踏まえ、オリジナル単元「自分の一日を紹介しよう」(10月)、「世界の国々について伝え合おう」(11月)として小学校6年生と中学校1年生との合同授業を設定した。

② 実践内容

ア 主題 「自分の一日を紹介しよう」(10月実施)

北伊予小学校 6年生 英語ノート2 Lesson7

北伊予中学校 1年生 Sunshine 1 Let's Communicate ②

イ 主題設定の理由

中学生の一日の生活は小学生の時と比べて大きく変化している。この単元では自分の一日の生活を英語で表現しながら、昨年と違う自分に気付くことができる。また、児童と生徒が互いに自分の一日を伝え合うことで、生活習慣の違いに気付いたり、よりよい表現の仕方を学んだりすることもできる。そこで、小中合同授業の指導に当たり、次のことに留意して授業を構成した。

- ・ 不安や抵抗感を減らし、期待をもたせる工夫
- ・ 小中学生が互いに積極的にコミュニケーションを図ろうとする雰囲気作り
- ・ 児童に無理をさせないために、文字をあまり使わず、音声での表現を重視
- ・ 小学校で慣れ親しみ、学んだ題材(内容)を扱い、更に発展させる学習内容の工夫
- ・ 小中学校双方のねらいを明確にした学習指導

③ 合同授業の成果

中学生にとっては、入学後、英語科で本格的に学習してきたことの披露の場になった。また、児童にとっては、これから進学する中学校での英語学習の様子を知る機会となり、多少なりとも児童の不安を取り除き、中学校での英語学習への憧れや期待をもつ場となった。また、教師と教師、教師と児童・生徒、児童と生徒と、人と人をつなぐ場ともなる。同じ地域の人と人がつながっているという安心感は、豊かなコミュニケーション能力を育成するための土台ともなる。このようなことから、小中連携において、児童と中学生の交流は、事前の準備等にかかなりの時間や労力を要したが、大変有効であった。

＜合同授業後の児童生徒の自己評価票の記述＞

- | | |
|-----|---|
| 小学生 | <ul style="list-style-type: none">・ 中学生は10時以降に寝るのが基本なんだなと思った。・ 中学生に自分の一日を知ってもらえてよかった。・ 中学生の英語の発音が上手だった。・ 来年の英語の授業が楽しみ。小学校で英語に慣れておきたい。・ 今日の授業を受けて、中学校でもがんばれそうだなと思った。 |
| 中学生 | <ul style="list-style-type: none">・ 小学生のみんなは9時30分に寝ているようだ。・ みんなの発表を聞くことがとても楽しかった。・ 思った以上に小学生が英語を話せていて驚いた。・ 小学生と一緒に授業をするのでわくわくした。小学生は私たちと同じ勉強をされていてすごい。負けないようにがんばりたい。 |